

## II-3

### 「見えざる手」って何？ (経済学、必修4賢人)

経済学を学ぶ時、知っておく必要のある歴史や、経済学者の存在があります。いつ、誰の手によって「経済学」が生まれ、彼らは世界の枠組みをどう変えていったのか。本章では多くの経済学者の中から、必修の4賢人(アダム・スミス、マルクス、ケインズ、サミュエルソン)を選びました。時の社会背景などを交えて、その偉業を紹介したいと思います。

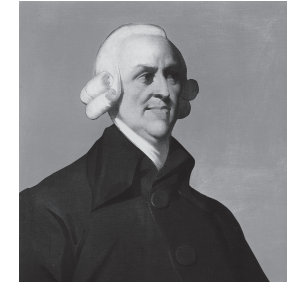
見えざる手——。この言葉を、誰しも一度は聞いたことがあるのではないのでしょうか。18世紀の英国で活躍した思想家、アダム・スミスが著書『国富論』の中で述べた有名なフレーズです。しかし、この「見えざる手」の意味を問われて答えられる人は多くはないはずです。本論に入る前に少し、『国富論』を見てみましょう。

④《個人は公共の利益を推進しようと意図してもいないし、どれほど推進しているかを知っているわけでもない。どの個人も生産物が最大の価値を持つような仕方方向づけることによって、儲けだけを意図している。そして他の多くの場合と同様に、見えざる手に導かれて、自分では意図の中に全くなかった目的を推進するようになる》(一部編集)

要するにスミスはこう言いたかったのです。「人はそれぞれ己の利益のために動こうとするが、市場という目に見えない調整機能が働いて、世の中の経済はうまく回る」と。

スミスは近代経済学の祖と呼ばれる人物です。英国の20ポンド紙幣の肖像画にも使われています。こうして見ても、同国にとっていかに大き

な存在かが分かります。いや、英国だけではありません。スミスが存在しなければ、現在の「資本主義」「社会主義」「共産主義」といった近代国家の枠組みは成立していなかったかもしれません。



アダム・スミス  
(写真=Newscom/アフロ)

#### 市場原理に任せよ

スミスが53歳で発表した『国富論』は世界に衝撃を与えました。1776年のことです。当時、英国やオランダなどを中心とする欧州諸国における経済学の常識は「重商主義」と呼ばれるものでした。つまり、国家は、金や銀をため込むことで豊かになるという考え方です。逆に、国内にある金や銀を海外へ流出させるということは、経済を弱体化させる、と。

ですから、この重商主義の下では国を豊かにするには、外貨を「ため込む」、つまり輸出産業を拡大させることが欠かせません。国家は輸出奨励金なるものを出して、輸出を促進しようと介入し出します。

一方で輸入は自国が保有する金や銀を流出させることになるので、政府主導で国内の産業を保護するなど様々な保護政策が取られてきました。これらの重商主義の考え方をスミスは否定します。国家の富は、何も金・銀に限ったことではない。様々なモノ(消費財)が流通すれば、国が豊かになるという考え方です。このスミスの理念に基づけば、輸出だけでなく輸入も同じように重要だということになります。

そしてスミスは、輸出奨励金のような国家の介入はやめて、市場原理に任せればおのずと経済は活性化する、と主張します。つまり「見え